献　詞

吉田永宏先生は、平成十九年三月三十一日にめでたく古稀をお迎えになり、それにともなって、同日、定年延長期間満了の故をもって、関西大学教授を退職されることとなった。

先生は、昭和三十五年に関西大学文学部を卒業され、新聞社勤務や奈良県・大阪府の府県立高等学校における教諭としてのご勤務を経て、昭和五十三年に関西大学文学部に助教授として御着任。同五十七年には教授に昇進され、その後、通算二十九年の長きにわたって、教育・研究の両面に活躍された。

先生の御研究の対象は、島崎藤村・森鷗外から戦後文学・現代文学まで幅広く、特に社会問題と文学の関わりについて多くの考察を重ねられ、数多くの御業績は学界でも高い評価を受けている。

先生の、文学研究に対する上記のような幅広く真摯な姿勢は、受講した学生たちにも大きな感銘を与え、その中から、たくさんの若い研究者が育っている。それだけでなく、数多くの、文芸創作を志す学生や読書好きの一般学生たちも、先生の学問的示唆に富む授業と、その温厚なお人柄に惹かれ、文学作品への正しいアプローチ方法を身につけて、それぞれの道へと巣立っていった。

先生はまた、図書館長、人権問題研究室室長などを歴任され、学校行政の面でもすぐれた手腕によって大きな実績を残されたことは、多くの人が知るところである。

先生が大学を退かれるのはさびしいかぎりだが、いかんともしがたく、このたびの古稀の御賀を記念して、私ども関西大学国文学会より『國文学』吉田永宏教授古稀記念号を献呈させていただくこととなった。先生の、今後ますますのご健康とご活躍を祈念し、また、国文学会全会員からの謝意を込めて、ここに本誌を捧げるものである。

吉田永宏教授略年譜

一九三七年（昭和十二年）

三月三十一日　大阪市天王寺区大道三丁目三十八番地（四天王寺南門に近く、天王寺師範学校にも近かった）に第二子の長男として生まれる。父・吉田仙、母・芳江。両親は共に小学校教員。この年七月、盧溝橋事件起こり，対中国の侵略戦争が全面化し、幼少時は戦争そのものであった。

一九四三年（昭和十八年）

四月一日　大阪市立聖和国民学校（現・聖和小学校）入学。前々年十二月八日の「大東亜戦争」開戦後の本格的な戦時体制下にあって授業は十分には行われなかったが、自宅にあった豊富な子ども向けの本のお蔭で読書好きの子に育ち、二年生の頃には近所の子どもを集めて本を読み聴かせていたという（但し本人には記憶なし）。ご多分に洩れず軍国幼年であり、軍歌を好んで覚えた。

一九四五年（昭和二十年）

三月十四日　未明の大阪大空襲で罹災、消防車のお蔭で全焼は免れたものの住み続けること能わず（自家だけでも油脂焼夷弾六発被弾）。

三月十六日　家族揃って大阪を脱出。混乱のさ中の大阪脱出であっただけに現在に至るも一、二年生時の同級生の氏名も所在も知れぬままである。

三月十七日　兵庫県美方郡熊次村字丹戸（現・養父市丹戸）在の父の実家・田淵善雄（父の兄）方に疎開、以後同村内を転々として住まう。この年は但馬地方は豪雪であった。

四月一日　熊次村立熊次国民学校（現・養父市奈良尾在、戦後は熊次小学校、平成十六年三月末日をもって閉校）三年に転入、以後熊次村の子どもとなる。

六月頃　校長先生が生徒用昇降口の黒板に「憎い憎いルーズベ

ルト前アメリカ大統領が死んだ。生きていたら鼻の穴に綱を通してこの運動場を引きずり回してやりたい程の憎い前大統領が死んだ。皆さん、戦争は勝ったも同然です。皆で喜びましょう！」との主旨の板書をされているのを目撃、その通りと同感。

八月十五日　熊次村字草出の西上賢三氏（父の従兄、同家は父方の祖母の実家）宅の土間で、正午の天皇のポッダム宣言受諾の「玉音放送」を聴く。雑音ばかりで子どもの耳には全く意味不明。直後、草出在の大人たちと居間で同時ラジオに耳を傾けていた父より敗戦を教わり、直ちに川に水遊びに飛び出した。感慨なし。

九月　始業式で校長先生の「これからはアメリカと仲良くしましょう。アメリカは民主主義の立派な国です」との訓辞を聴き、先日のルーズベルト死去に際してのコメントを板書していた人と同一人物なのか疑念を抱く。

一九四六年（昭和二十一年）

八月　父に講談社『少年クラブ』復刊第一号を買って貰う。獅子文六の疎開少年を描いた連載小説「広い天」や作者は忘れたが少年野球小説「がんばれテッちゃん」を夢中で読み、以後この薄っぺらな雑誌の定期購読者となる。雑誌の定期購読者は『少女クラブ』の姉を除けば村でただ一人であった。

一九四八年（昭和二十三年）

春休みに父に伴われて大阪に滞在中、初めて甲子園の選抜中等学校野球大会（旧制中学校の名を冠した最後の大会）を外野席で観る。

野球場なるものに驚き、以後高校野球の熱烈なファンとなり、自らも野球少年となる。

一九四九年（昭和二十四年）

四月　熊次村立熊次中学校入学。中学校の三年間は野球に暮れる。一方で、但馬地方で小・中学生を対象として刊行されていた文芸誌『草笛』に俳句を中心として毎号投稿，秘かに文学少年を志す。

一九五〇年（昭和二十五年）

朝鮮戦争勃発、夏、村の上空を米空軍爆撃機編隊が朝鮮半島を目指して飛ぶのを見上げる。

一九五二年（昭和二十七年）

四月一日　兵庫県立八鹿高等学校・普通過程に入学。進学体制を強めていた同校の受験クラスに在籍。担任は三年間共に西岡幸利教諭（旧制姫路高校出身の数学の先生で、蛇光の号を有つ俳人、後兵庫県高等学校教員組合中央執行委員を経て同

中央執行委員長)、男子寄宿舎に二ヵ月程いたが、校門前の岩大七・みさをご夫妻宅に下宿、卒業までお世話になる。新聞記者志望で高校三年間、新聞部員として熱心に活動(顧問は担任の西岡先生)。『中学生毎日新聞』文芸欄の常連であった太田垣明生(養父郡・広谷中学出身)と同じクラスとなり、以後文学作品を語り合う友となる。寄宿舎では一年上に森井典男(美方郡村岡中学出身)がいた。国語の小野山繁、漢文の生田隆両先生の強い影響を受ける。

一九五三年(昭和二十八年)高校二年

十月　生徒会役員として数人の仲間と共に西日本学生平和会議(於京都大学)に参加、鴨沂高校(京都)・新宮高校(和歌山)の諸君と共に大学生のデモ行進に加わる。

一九五四年(昭和二十九年)高校三年

肋膜を患って休学中であった一年上の森井典男が復学、同じクラスのメンバーとなり、交流深まる。

十一月　学校祭の合唱歌歌詞入選。学校祭デモンストレーションにアメリカのビキニ環礁核実験の被害者・久保山愛吉さん(第五福竜丸乗組員)追悼をクラスのテーマとする。クラス対抗の朝日式討論会(三人でチーム構成)で優勝(優勝戦のテーマは憲法改正の是非)。前年より文藝部機関誌『紅露』の寄稿者となり、小説数篇、評論「五木の子守歌――支配者への抵抗――」、戯曲「暗い季節」などを書く。学校新聞にも小説を書く。生意気盛りであった。この年、祖母・ゑいを喪う。

一九五五年(昭和三十年)

三月三十一日　八鹿高校卒業。

四月一日　関西大学文学部国文学科入学。発足したばかりの音痴コーラス(のち葦の葉コーラス、現・合唱団〝葦〟)に加わる。溝川英郎(法学部三年)と二人で現代文学研究会の結成を呼びかけるも、学術研究会民主主義文学研究部・加藤三郎の強引な説得工作(分裂策動である、との)により結実せず、説明半ばで解散。桜井郁子・水本精一郎(のち山口大学教授)らの大阪宮本百合子研究会に参加。八鹿高校のクラスメイトであった太田垣明生が森井典男らと語らい西岡先生を担ぎ文藝同人誌『新山脈』(タイトルは吉田の案)を創刊(但し1号のみで続かず)。永積安明教授の許で軍記物語を中心とした中世文学を研究したいとの強い志望を持ち、東大・京大を奨める声に耳を藉さず、神戸大学文学部国文学科に進んだ森井典男との交流一層強まる。

一九五六年(昭和三十一年)

四月　民主主義文学研究部(学術研究会)入部、程なく部長と

なり、神田敏正（法学部二年・詩人）らと機関誌『肖像』の発行に意を注ぎ、うたごえ運動からこちらに活動の力点を移す。前年より『新日本文学』を愛読。

一九五七年（昭和三十二年）

『学術研究』（学術研究会本部発行）に「今井正監督作品『米』について」を書く。

一九五八年（昭和三十三年）

この頃『学術研究』誌に、花田、吉本論争に於ける吉本のプロレタリア文学否定論を批判した「吉本隆明のプロレタリア文学批判をめぐって」を書く。この年、熊次小学校校歌を作詞。

一九五九年（昭和三十四年）

四月、「戦争責任とは何か」（『関西大学新聞』昭和三十五年四月二十二日）を書く。

十月十日「最近のポーランド映画――『灰とダイヤモンド』を中心に――」（『関西大学新聞』）を書く。

翌年の学術祭の講演依頼のため小田切秀雄・法政大学教授を訪ねるも、先約があり日程的に不可能、しかし朝食をご馳走になり二時間程話し相手になって頂く。これが機縁となり帰阪後、谷沢永一先生（当時・助手）と国文学科合同研究室でお会いする機会を作って頂き、以後ご指導を得ることになる。

十一月、国民文化会議全国大会が大阪で開催、労働者作家・泉大八を伴って評論家・武井昭夫の来訪するを知り、民主主義文学研究部主催の武井昭夫文学講演会を企画実施（演題「石川達三の『人間の壁』をめぐって」）。

夏頃、加藤三郎の強い勧誘を受け、加藤を中心とする〈グループ五〇年代〉に唯一人の学生として参加。

十二月、文芸評論同人誌『五〇年代　政治と文学』創刊（編集人・田島静香、発行人・畑井久美子）、同人は加藤、吉田の計四人（のちに脇田憲一、藤本正彦が加わる）。

一九六〇年（昭和三十五年）

三月三十一日　関西大学卒業。

四月一日　中学校一級教員普通免許取得（国語）

四月一日　高等学校二級教員普通免許取得（国語）

三月七日　産業新聞社編集局勤務。

一九六一年（昭和三十六年）

一月十三日　『立命館大学新聞』に「労働者文学の現状と課題」を書く。

一九六二年（昭和三十七年）

三月十日　『大阪大学新聞』（第百八十九号　大阪大学新聞会）

に「泉大八『アクチュアルな女』」論を書き、以後四十二年十一月（第二百七十五号）まで同紙にほぼ毎月文芸時評を執筆。

四月、同人誌『五〇年代』第七号（終刊号）発行。

七月、三月の父の小学校長退職を機に八尾市山城町三丁目に居を定め、両親と住む。

一九六三年（昭和三十八年）

五月十日　中井昌子（大阪市立南田辺小学校教諭）と結婚。

九月三十日　産業新聞社退社。

十月一日　奈良県立畝傍高等学校教諭に就任。

十二月一日　新日本文学会会員になる。（平成十四年六月三十日まで）。

一九六四年（昭和三十九年）

三月、新日本文学会第十一回大会の最終日に漸く出席が出来，本多秋五の発言を聴く。

一九六六年（昭和四十一年）

十月三十日　『大阪経済大学新聞』（大阪経済大学新聞会）第百五十号に「戦後文学の評価をめぐって―その思想的弁護―」を書き、以後昭和四十三年十一月三十日（第百六十七号）まで同紙上に現代文学についての発言を数度にわたって掲載。

一九七一年（昭和四十六年）

四月、畝傍高校の校務分掌では図書館教育部・文化部・同和教育部に属していたが、この年より同和教育部に専念、生徒会のサークル〈部落解放研究部〉の顧問となる。

十月、被差別部落出身の作家・土方鐵による部落問題の講演を畝傍高校全生徒を対象に開催。

一九七二年（昭和四十七年）

十月、畝傍高校の部落解放研究部部室の黒板に三年生男子二名が同和教育否定を旨とする長文を昼食時に板書する所謂「板書事件」が起こり、全力でこれに当たる。

一九七三年（昭和四十八年）

四月一日　大阪府立布施高等学校に転任。

一九七五年（昭和五十年）

四月一日　関西大学非常勤講師を兼任する。

一九七六年（昭和五十一年）

四月一日　大阪府立旭高等学校に転任。

一九七八年（昭和五十三年）

三月三十一日　大阪府立旭高等学校教諭を依願退職。

四月一日　関西大学文学部助教授に就任。

大阪商業大学非常勤講師を兼任する。（五十五年三月まで）

一九七九年（昭和五十四年）
四月一日　日本近代文学会関西支部事務局員に就任。（平成二年三月三十一日まで）
十一月二日　吹田市民大学教養講座（秋期）〈旅ゆく日本文学〉が開催され、「太田豊太郎〈舞姫（森鴎外）〉」を講演。
一九八〇年（昭和五十五年）
十月三十一日　吹田市民大学教養講座（秋期）〈名作にたどる女性の横顔〉が開催され、「有島武郎『或る女』葉子と宮本百合子『伸子』伸子」を講演する。
一九八一年（昭和五十六年）
四月一日　金蘭短期大学非常勤講師を兼任する。（平成十年まで）
一九八二年（昭和五十七年）
四月一日　関西大学文学部教授に就任。
花園大学文学部非常勤講師を兼任する。（昭和六十一年まで）
十一月十二日　吹田市民大学教養講座（秋期）〈ラブシーンでたどる日本文学史〉が開催され、「時雄と芳子『蒲団』」を講演。
十二月十七日　おおさか文化セミナー〈大阪論　文学に描かれた大阪〉が開催され、「開高健の描いた大阪」を講演する。

一九八三年（昭和五十八年）
七月十一日　千里市民講座十周年記念講演が開催され、「近代文学に見る家族」を講演。
十一月十八日　吹田市民大学教養講座（秋期）〈名文句・名セリフでたどる日本文学史〉が開催され、「名文句にみる戦後文学—戦中・戦後を人々はどう考え、どう生きてきたか—」を講演する。
十一月二十七日　神戸文学校公開教室が開催され、センタープラザ西館にて「中野重治の評論について」の講演をする。
一九八四年（昭和五十九年）
おおさか文化セミナー〈時代と人間を考える　春期〉で五月一日　上司小剣「鱧の皮」—大阪の食物文学誌—」を、十一月六日〈時代と人間を考えるⅡ　秋期〉で、「〈暗い谷間〉の青春像—野間宏と堀田善衛にみる—」を講演する。
十一月二日　吹田市民大学教養講座（秋期）〈日本文学にみる女性像〉が開催され、「戦後文学の女たち」を講演する。
十一月二十四日　千里市民講座〈近代における日朝関係史〉が開催され、「在日朝鮮人の作家たち—金達寿・金石範・李恢成を中心に—」というタイトルで講演する。

一九八五年（昭和六十年）
おおさか文化セミナー〈かみがた学藝游記〉の講座で
五月七日　「大阪人作家の作家根性―開高健にみる」を、十月八日〈かみがた学藝游記　Part 2〉で「文学史としての現代文学」を講演。
五月十六日　大阪茶の間ペンクラブ総会で「文学史としての現代文学」と題し、記念講演（市立婦人会館）。
九月二十七日　吹田市民大学教養講座（秋期）〈日本文学におけるさまざまな出逢い〉で「批評家と作家の邂逅―蔵原惟人と小林多喜二の場合―」を講演。
十一月十六日　昭和の激動と文学―龍之介の自殺からプロレタリア文学の崩壊へ―〈転換期の歴史と文学〉の演題で、寝屋川市民大学で講演。
一九八六年（昭和六十一年）
四月一日　立命館大学文学部非常勤講師を兼任する。（平成七年まで）
七月一日　有島武郎「或る女」の葉子　あこう婦人大学〈名作にたどる日本の女性像〉を赤穂市民会館で講演。
おおさか文化セミナー〈浪花好学一夕話〉の講座で、
七月一日　「在日韓国・朝鮮人の作家たち」を、十一月二十五日「事実と小説の間―藤村『新生』の世界」（関大創立100周年記念）を講演。
十一月二十八日「有島武郎『或る女』の葉子」第15回吹田市民大学教養講座　関西大学創立100周年記念）などの講演活動をする。
一九八七年（昭和六十二年）
一月二十二日「〈在日〉を生きる作家たち」文学講座〈在日〉韓国・朝鮮人作家をめぐって（大阪市立北市民教養ルーム）
三月十二日　「川端康成について〈作家―その生涯と作品〉」（大阪・中之島ロイヤルホテル）
おおさか文化セミナー〈古今勧学夢暦〉の講座で、
六月三十日　田辺聖子「私の大阪八景」の世界を、十一月二十四日〈古今学林夢見小路〉で、水上滝太郎「大阪」「大阪の宿」を府立情報センターで講演。
朝日カルチャーセンター・奈良で「芥川龍之介を読む」と題し、
七月十二日　①「羅生門」「鼻」など初期作品
八月九日　②「河童」「歯車」などに見る苦悩
九月十三日　③芥川の自死の問題―激動の昭和期の幕開け、を三回連続講演。
千里市民講座近代史の会で、〈戦後文学にみる青春と政治〉の講

座が開催され、九月十二日　野間宏『暗い絵』を読む、十月三日「されどわれらが日々」を読む、十月三十一日　高橋和巳「憂鬱なる党派」を読む　を連続三回講演。

十一月二十三日　激動の昭和（その2）敗戦直後の文学の様相（吹田市民大学教養講座）を講演。

十一月二十六日　小林勝とその作品について　文学講座「〈在日〉韓国・朝鮮人作家をめぐって」を講演する。

一九八八年（昭和六十三年）

千里市民講座で、〈自然主義文学の代表作を読む〉が開催され、四月十九日・五月十九日の二回にわたり、「島崎藤村『破戒』を読む」、を講演、六月二十一日「田山花袋『蒲団』を読む」を講演。

おおさか文化セミナー（秋期）〈おおさか学苑玉手箱Ⅱ〉で、九月十五日　谷崎潤一郎「卍」の世界

十一月八日　大阪弁の文学表現を二回にわたって講演。

十一月十八日　親友との行く道の別れ―野間宏「暗い絵」の世界（秋季吹田市民大学教養講座）で講演する。

一九八九年（平成元年）

千里市民講座で、〈現代文学の女性〉が開催され、四月十九日　野上弥生子「真知子」の真知子、五月十七日　佐多稲子「くれない」の明子、六月二十一日　宮本百合子「播州平野」のひろ子　七月十九日　有吉佐和子「華岡青洲の妻」の於継と加恵を連続四回講演。

十月一日　図書館長を命じられる。（任期は平成三年九月三十日まで）。

おおさか文化セミナー（秋期）〈なにわ歓閑楽学誌Ⅱ〉で十一月十四日　「黒岩重吾の人と作品―直木賞受賞の前後―」を、

吹田市民大学教養講座（秋期）〈日本文学にみる教育の問題〉で十一月十七日　「義務教育の年限―徳永直『八年制』にみる―」を講演する。

一九九〇年（平成二年）

四月一日　関西大学情報処理センター委員会委員を命じられる。（任期は平成四年九月三十日まで）。

五月十四日　近代文学にみる大阪―人・風土・大阪弁（関西大学図書館春季特別展記念講演　関西大学総合図書館）

おおさか文化セミナー（春期）〈学窓遊悠掌話録〉で、七月十日　「漱石『それから』の世界―明治知識人の愛の行方」、（秋期）〈学窓遊悠掌話録Ⅱ〉で、十月三十日「戦後文学評論の問題―「政治と文学」論争その他―」をそれぞれ講演。

「後期」昭和文学史講座が千里市民講座で開催され、
十月三日　プロレタリア文学（その1）・『文芸戦線』発行前後、
十一月七日　新感覚派の誕生『文藝時代』創刊、
十二月五日　プロレタリア文学（その2）をそれぞれ講演。
十月十九日　後期市民大学教養講座〈日本文学にみるグルメ〉で、戦時・戦後の飢餓時代―戦後文学の作品から―を講演。
十月二十七日　川端康成―死生観と文学〈昭和激動期の作家たち　生と死の文学〉（講演と映画の読売文化講座　読売新聞大阪本社5F講堂）を講演
一九九一年（平成三年）
前年の「後期」昭和文学史講座に次いで、
一月九日　マルクス主義運動の崩壊（転向文学）など
二月二十七日　昭和十年代の文学　をそれぞれ講演する。
千里市民講座・昭和文学史の講座が開催され、千里市民センターで
四月十七日　新感覚派の成立と展開、五月八日（転向文学―中野重治・宮本百合子）、六月五日　『文芸復興』とその周辺、七月三日　昭和十年代の文学、八月七日　雑誌の復刊創刊と大家の復活、九月六日　無頼派の作家たち、九月二十七日　民主主義文学―政治と文学の問題、十一月十五日　戦後派の作家たち　を連続八回講演。
五月十八日　青春の川端康成（読売新聞大阪本社茨木別館印刷工場稼動記念　文学歴史講演会　茨木市民総合センター）を講演。
六月五日『文藝復興』とその周辺（千里市民講座近代史の会）を講演。
おおさか文化セミナー（春期）〈学心芳香花語〉で、
七月二日　青春の川端康成―「十六歳の日記」その他―を、（秋期）〈学心芳香花語Ⅱ〉で、十一月五日　推理小説を読む―乱歩・正史・そして清張―をそれぞれ講演。
九月三十日　関西大学情報処理センター委員会委員を解かれる。
十月十四日　〈日本文学にみる合戦の諸相〉というタイトルで、吹田市民大学教養講座（秋期）が開かれ、ベトナム戦争と日本・日本人―開高健「ベトナム戦記」「輝ける闇」を講演。
連続講座　在日朝鮮人文学4回（豊中市教育委員会）
田山花袋「蒲団」の私小説性をめぐって（兵庫県高校国語研究会・主催兵庫県教育委員会）など関西各地で積極的な講演活動をする。

一九九二年（平成四年）

四月一日　日本近代文学会評議員に就任。（任期は平成五年三月三十一日まで）。

千里市民講座　近代史の会が開催され、吹田市メイシアターで

四月二十一日　志賀直哉著「暗夜行路」、六月二日　小林多喜二著「蟹工船」、六月三十日　昭和期の文学作品を読む―永井荷風著「濹東綺譚」、七月二十一日　芥川龍之介著「歯車」「ある阿呆の一生」　九月一日　谷崎潤一郎著「春琴抄」、九月二十九日　横光利一著「上海」、十月二十七日　川端康成著「雪国」、十二月八日　島木健作著「生活の探求」を八回連続講演。

おおさか文化セミナー（春期）〈学友飄談謳歌集〉で、

七月七日　松本清張―事実と虚構の間、（秋期）〈学友飄談謳歌集Ⅱ〉で、九月二十日　作家たちの8・15―文学者は敗戦をどう受けとめたか―を講演。

十月一日　大学院委員会委員を委嘱される。（任期は平成六年九月三十日まで）

十月一日　関西大学情報処理センター委員会委員を命じられる。（任期は平成六年三月三十一日まで）。

十月二十二日　〈日本文学にみる〈家〉〉という総題で吹田市民大学教養講座（秋期）が開催され、「自然主義文学に見る〈家〉―藤村の「家」など―」を講演。

十月二十四日　松本清張の世界―事実と虚構の間〈関西大学文化セミナー〉（福岡商工会議所三階ホール）を講演する。

一九九三年（平成五年）

四月一日　保健体育委員会委員長に就任（任期は平成七年三月三十一日まで）。

千里市民講座〈昭和期の文学作品を読む〉が吹田市千里市民センターにて開催され、

五月七日「戦後文学の諸相」、六月二十五日　野間宏「暗い絵」、七月三十日　太宰治「人間失格」、八月二十日梅崎春生「桜島」、九月十七日　椎名麟三「深夜の酒宴」、十月二日　武田泰淳「蝮のすゑ」、十月三十日　坂口安吾「白痴」、十一月十三日　大岡昇平「野火」「俘虜記」の連続八回講演をする。

おおさか文化セミナー（春期）〈文藻飛来戯言抄〉で、

七月六日　戦後史のナゾを読む―松本清張「日本の黒い霧」―を講演。

〈日本文学にみる親子の関係〉というタイトルで、吹田市民大学教養講座（秋期）が開催され、

十月二十二日　父と子の葛藤・和解から調和へ―志賀直哉「和解」の世界と「暗夜行路」を講演。

プロレタリア文学運動の理論活動―5回（大阪文学校自主講座）などの講演をする。

一九九四年（平成六年）

三月一日　差別と闘う文化会議会員になる。（平成十七年二月二十日まで）。

四月一日　関西大学人権問題研究室研究員を命じられる。（任期は平成八年三月三十一日まで）。

前年に引き続き、千里市民講座〈昭和期の文学作品を読むⅢ〉が吹田市千里市民センターにて開催され、

五月二十日《筒井康隆断筆宣言》差別と表現、六月十七日　開高健著「輝ける闇」、七月十五日　開高健著「日本三文オペラ」、安部公房著「砂の女」、九月二日　大江健三郎著「われらの時代」、十月八日　三島由起夫著「金閣寺」、十月二十九日　遠藤周作著「沈黙」、十一月二十六日　島尾敏雄著「死の棘」の連続八回の講演をする。

六月一日　関西大学大学協議会協議員を委嘱される。（任期は平成八年五月三十一日まで）。

おおさか文化セミナー（春期）〈学風頌辞佳話〉で、

七月五日　大正期知識人の苦悩―有島武郎「宣言一つ」の問題―を講演。

九月二十四日　事実と虚構の間―山本周五郎「樅の木は残った」の場合―（関西大学・河北新報社主催）を講演。

伊丹市立図書館文学セミナー〈日本文学にみる母の相貌〉で、

十二月六日　有吉佐和子「華岡青洲の妻」―母が姑に変わるとき―などの講演をする。

一九九五年（平成七年）

前年に引き続き、千里市民講座〈昭和期の文学作品を読むⅣ〉が吹田市千里市民センターにて開催され、

五月二十六日　川村湊著「戦後文学を問う」、六月二十三日　中野重治著「五酌の酒」、七月十四日　大江健三郎著「政治少年死す」、八月四日　佐多稲子著「時に佇つ」、九月一日　金達寿「小説在日朝鮮人史」、十月七日　小林多喜二著「党生活者」、十月二十八日　山本周五郎著「樅の木は残った」、十一月十八日　堀田善衛著「広場の孤独」の連続八回の講演をする。

吹田市民大学教養講座（秋期）〈日本文学にみる「政治」〉で、

十月二十七日　〈政治の優位性〉の問題―革命運動の政治と文学―を講演。

十一月七日　敗戦直後の文学の世界―戦後50年の視点から（大阪府立文化情報センター）

十一月二十八日　十月二十七日と同じ演題で、伊丹市立図書館文学セミナーで講演。

表現の自由と差別の問題―藤村「破戒」から筒井康隆〈断筆宣言〉までをめぐって（奈良県高等学校図書館教育研究会司書部主催）など各地でいろんな講演活動をする。

一九九六年（平成八年）

四月一日　関西大学人権問題研究室研究員を命じられる。（任期は平成十年三月三十一日まで）。

千里市民講座〈近代文学の諸問題〉が吹田市千里市民センターにて開催され、

五月二十四日　二葉亭四迷「浮雲」森鴎外「舞姫」（近代的自我をめぐって）、六月十四日　島崎藤村　その一「破戒」（社会的問題、告白文学）、七月十二日　島崎藤村　その二「新生」（私小説の問題）、八月二日　田山花袋「蒲団」（自然主義文学の問題）、九月十三日　夏目漱石「それから」（反自然主義文学の問題）、十月二十六日　谷崎潤一郎「刺青」「痴人の愛」（耽美主義における美）、十一月九日　志賀直哉「暗夜行路」（日本の恋愛小説）、十二月十四日　芥川龍之介「羅生門」「鼻」（歴史小説とは）を連続八回にわたり講演。

おおさか文化セミナー（春期）〈大阪のいま昔〉で、

七月二日　野間宏の世界―「青年の環」を中心に―（大阪府立情報センター多目的ホール）を講演。

十月一日　関西大学自己点検・評価委員会委員を命じられる。（任期は平成十年三月三十一日まで）。

十月十八日　公開シンポジウム「在日朝鮮人文学の新地平」―の司会（関西大学千里山キャンパス総合図書館）をする。

吹田市民大学教養講座（秋期）〈日本文学にみる貧富の問題〉で、

十一月一日　農民の貧苦のすがた―「貧しき人々の群」「お末の死」など―を講演。

十一月三十日　関西大学文化セミナー（中日新聞社共催）で、「敗戦直後の文学の世界」を講演。

十二月三日　十一月一日と同じ演題で、伊丹市立図書館文学セミナーで講演。

一九九七年（平成九年）

〈日本文学にみる〈法〉の問題〉について第26回吹田市民大学教養講座が千里市民センター大ホールで開かれ、

十月二十四日　伊藤整訳「チャタレイ夫人の恋人」事件―芸術は法で裁けるか―を講演。同じテーマで伊丹市立図書館文学セミナーが開講され、十二月九日にも伊丹市立図書館で講演する。

朝日カルチャーセンターによる奈良文学散歩が八月二十日、十一月十九日　十二月十七日の三回にわたって開講、講演する。

一九九八年（平成十年）

前年に続き、朝日カルチャーセンターによる奈良文学散歩が開催され、文学鑑賞・実作コースを二月十八日、五月二十日の二回講演。

六月二十六日　金達寿の世界―在日朝鮮人文学の問いかけるもの（人権問題研究室公開講座）を講演。

〈日本文学にみる酒の話〉について、第27回吹田市民大学教養講座（春期）が新関西大学会館北棟一階多目的ホールで開催され、

七月九日　作家の酒・作品の酒―中野重治「五勺の酒」など―を講演。

おおさか文化セミナー（秋期）〈近畿の玉手箱〉で、

十月二十七日　神戸　谷崎潤一郎そして野坂昭如を講演。

十月三十日　伊丹市立総合教育センターでも、七月九日と同じ演題で講演。

連続講座〈日本近代史を考える〉5回　1．島崎藤村と「破戒」2．夏目漱石と「私の個人主義」3．芥川龍之介と歴史小説4．近代日本の女流作家たち　5．大江健三郎の文学（長岡京市・中央公民館）

文学講座「明治時代の文学―明治の作家の生態―」1．森鴎外―ドイツ留学と「舞姫」2．夏目漱石の愛の世界―「それから」―3．島崎藤村の性の問題（高槻市立北清水公民館主催）

各地で連続講座を開催、講演する。

一九九九年（平成十一年）

おおさか文化セミナー（春期）〈大阪の扉〈―知を啓く―〉〉で、

六月二十九日　文―開高健の〈大阪〉―を講演。

吹田市民大学教養講座（春期）〈日本文学にみる〈自然〉の諸相〉で、

七月九日　近代文学における〈嵐〉―露伴「五重の塔」・直哉「颱風」など―を講演。

十一月十九日　伊丹市立図書館文学セミナーでも同じ演題で講演。

連続講座〈日本近代史を考える〉5回　1．田山花袋「蒲団」をめぐって　2．谷崎潤一郎「刺青」の問題　3．志賀直哉「暗夜行路」4．プロレタリア文学運動をめぐって　5．野間宏「暗い絵」の世界（長岡京市・中央公民館）などの講演をする。

二〇〇〇年（平成十二年）
吹田市民大学教養講座（秋期）〈日本文学に見る外国との交流〉で、
十月二十日　井伏鱒二「ジョン万次郎漂流記」―異文化との出会い―を講演。
十月二十八日　関西大学文化セミナーで、戦時下の作家活動―火野葦平・石川達三をめぐって―を講演。
十二月一日　十月二十日と同じ演題で、伊丹市立図書館文学セミナーで講演。
二〇〇一年（平成十三年）
吹田市民大学教養講座（春期）〈文学と日記〉で、
六月二十八日　〈嗚呼、八月十五日〉―高見順「敗戦日記」を読む―を、十一月十六日　同じ演題で、伊丹市立図書館文学セミナーで講演。
二〇〇二年（平成十四年）
関西大学吹田市民講座（春期）〈日本文学と手紙〉で、
七月五日　近代の文学と手紙：中野重治「愛しき者へ」―激動昭和期文人の情意―を千里市民センターで講演。
関西大学おおさか文化セミナー（秋期）〈近畿を訪れて〉で、
十月一日　神戸―近代文学に見るその貌―を講演。
十一月十五日　七月五日と同じ演題で、伊丹市立図書館文学セミナーで講演。
二〇〇三年（平成十五年）
関西大学吹田市民講座（春期）〈日本文学に見る働く人びと〉で、
七月四日　近代文学と労働者―プロレタリア文学の世界―を講演。
関西大学おおさか文化セミナー（秋期）〈近畿を訪れて〉で、
九月三十日　「大阪在日朝鮮人文学を読む」を講演。
十一月十五日　熊次小学校最後の創立記念日（翌年三月末日をもって関宮小学校に統廃合となるため）の記念式典において「校歌に寄せる思い」の演題で講演。
二〇〇四年（平成十六年）
関西大学吹田市民講座（春期）〈日本文学に見る〈世間〉〉で、
七月二日　近代文学の〈世間〉―島崎藤村「破戒」・野間宏「真空地帯」など―を講演。
九月十日　伊丹市立中央公民館にて　松本清張―芥川賞受賞から推理小説へ―を講演する。
関西大学おおさか文化セミナー（秋期）〈近畿を訪れて―近畿に生きた人々〉で、
十月十二日　大阪―天王寺に生まれた開高健―を講演。

二〇〇五年（平成十七年）

朝日カルチャーセンター・奈良で、日本近現代の文豪―夏目漱石を読む

①一月二十一日　「吾輩は猫である」―作家の誕生　②二月八日「それから」―初期三部作の中心、③三月八日「行人」人間の索漠とした姿、④四月十二日「虞美人草」―初期新聞小説をめぐって、⑤五月十日「私の個人主義」の問題、⑥六月十四日　漱石とその周辺の人びと　の連続六回

ついで朝日カルチャーセンター・奈良で、島崎藤村を読む

①七月十二日「破戒」―社会小説、告白小説の問題、②八月九日「新生」―自らの暗部の作品化、③九月十三日「夜明け前」―転換期における父の生涯　の連続三回

つづいて〈自然主義作家三人を読む〉

①十月十一日　田山花袋「蒲団」―私小説への道、②十一月八日　徳田秋声「あらくれ」―自我を貫く女の生態、③十二月十三日　近松秋江「疑惑」―破滅型私小説の完成　の連続三回講演をする。

二〇〇六年（平成十八年）

前年についで朝日カルチャーセンター・奈良で、〈松本清張を読む〉

①一月十日　芥川賞受賞のころ―「西郷札」「或る『小倉日記』伝」など、②二月十四日　清張ミステリーの神髄―「点と線」「ゼロの焦点」「砂の器」など、③三月十四日　戦後の怪事件追及―「日本の黒い霧」とその周辺　の連続三回

ついで〈志賀直哉を読む〉

①四月十一日『白樺』の志賀直哉―父との不和から和解への道、②五月九日　奈良の志賀直哉と作家たち―「日曜日」「颱風」、③六月十三日「暗夜行路」の世界　の連続三回

関西大学吹田市民講座（春期）〈日本文学に見る戦争と平和〉で、六月八日　昭和文学に見る戦争―「麦と兵隊」「野火」「真空地帯」など―を講演。

ついで〈芥川龍之介を読む〉

①七月十二日「羅生門」「鼻」など初期作品、②八月九日「河童」「歯車」などに見る苦悩　③九月十三日　芥川の自死の問題―激動の昭和期の幕開け　の連続三回

九月八日　関西大学茨木市民人権講座で「破戒」100年と部落問題　を講演。

さらに〈昭和初期の作品を読む〉

①十月十日　川端康成の初期作品―「十六歳の日記」を中心に、②十一月十四日　新感覚派の旗手・横光利一―「上海」など

③プロレタリア文学と小林多喜二―「党生活者」の問題　の連続三回を講演する。

十一月二十八日　関西大学おおさか文化セミナー「京の女、大阪の女」の講座で、「与謝野晶子の情熱―君死にたまふことなかれ」を講演する。

十二月十六日　関西大学国文学会にて吉田永宏教授特別公開講演会「〈政治の優位性〉と〈文学の自立〉と―戦後の「政治と文学」論議―」を講演。

二〇〇七年（平成十九年）

三月三十一日　関西大学を退職する。

（増田周子作成）

吉田永宏教授著述目録

一九六三年（昭和三十八年）
「安部公房「砂の女」の二つの評価」（『新日本文学』九月一日　第十八巻九号　九四～一〇二頁）
一九六六年（昭和四十一年）
「三島由紀夫の美をめぐって」（『奈良県立畝傍高等学校紀要』一月八日　第二号　一二～一七頁）
一九六九年（昭和四十四年）
鴎外「舞姫」小論（『奈良県立畝傍高等学校紀要』十月一日　第三号　一～八頁）
一九七〇年（昭和四十五年）
「安部公房『幽霊はここにいる』―戯曲における批評性」（大阪勤労者演劇協会『大阪労演』四月十日　六～八頁）
一九七一年（昭和四十六年）
〈私小説〉論の方法―伊藤整の場合について―（『奈良県立畝傍高等学校紀要』四月一日　第四号　二六～三五頁）
一九七七年（昭和五十二年）
戦後「政治と文学」論争・その後―主として中野重治・平野謙について―（関西大学国文学会『国文学』九月二十五日　第五十四号　一〇一～一一一頁）
一九七八年（昭和五十三年）
戦後「政治と文学」論争はなぜ流産したか（學燈社『國文學』九月二十日　一四三～一四七頁）
二〇年前と今日―「六か月の大学生活」（『関西大学通信』十月十八日　第八六号　第四面）
迷った挙句の一冊―「文庫本時代」（『関西大学通信』十一月二十九日　第八七号）
開高健「渚から来るもの」とその改作「輝ける闇」との比較検討（『面白半分』第十三巻七号　一六二～一六六頁）

一九七九年（昭和五十四年）

長與善郎「遅すぎた日記」その他（『信州白樺』二月二十五日　第三十一・三十二合併号　七〇～八八頁）

小笠原克「野間宏―《日本》への螺階」読後の一章（『評言と構想』三月三十一日　第十五輯　九三～九六頁）

部落問題と天皇制―奈良・洞部落の場合―（『信州白樺』五月三十日　第三十三号　一〇六～一一三頁）

徳永直・宮本百合子（明治書院刊・長谷川泉他編『資料による日本近代文学』七月五日　三七三～三七八頁）

徳永直「八年制」私注（『政治と文学』九月一日　創刊号　三〇～三八頁）

中野重治「しらなみ」―現代詩を読む―（學燈社刊『國文學』九月二十日　七三～七七頁）

谷沢永一・肥田晧三・浦西和彦編新刊紹介『露伴全集付録』『関西大学通信』十月二十四日　第九五号）

平野謙における戦後（『国文学　解釈と鑑賞』十二月一日　第四十四巻十三号　八一～八七頁）

一九八〇年（昭和五十五年）

集団的読書―読者の位相―（国書刊行会刊『新批評近代日本文学の構造』第2巻　一月二十日　一九九～二一四頁）

官学と私学―近代文学の風土として―（国書刊行会刊『新批評近代日本文学の構造』第3巻　三月二十日　一二一～一三四頁）

甘えの世代と沈潜の文学―文学状況の批判―（『書評』四月　第五十一号　一五～二五頁）

部落差別に深い認識を（『関西大学通信』四月八日　第百号　第四面）

有吉佐和子『華岡青洲の妻』注解（『新潮文庫』四月十日　二〇六頁～二一九頁）

文学空間としての都市・大阪（『国文学　解釈と鑑賞』六月一日　第四十五巻六号　五五～六三頁）

一九八一年（昭和五十六年）

芥川龍之介「鼻」・「偸盗」（作品事典）（明治書院刊『芥川龍之介研究』三月五日　二六七～二六八頁　二七三～二八四頁）

特集・新入生へ贈る―今読むべき本はこれだ―伊藤整著『近代日本人の発想の諸形式』（岩波文庫）（『書評』四月　第五十五号　一二～一三頁）

特集・在日朝鮮人文学とその周辺　在日朝鮮人文学覚え書（一）（『書評』九月　第五十七号　二一～二三頁）

一九八二年（昭和五十七年）
宮本顕治・宮本百合子・除村吉太郎―情報選択の力量―（明治書院刊『資料による日本近代文学・評論篇』三月二十五日　一五五頁、二四六～二四七頁）
野間宏・開高健（角川書店刊『鑑賞日本現代文学24』四月三十日　二六九～四一八頁、四六三～四六七頁、四八一～四九六頁）
連載―在日朝鮮人文学覚え書（二）（『書評』四月　第六十号　八二～八五頁）
一九八四年（昭和五十九年）
「安部公房『幽霊はここにいる』のトシエ」（學燈社刊『國文學』臨時増刊号　三月二十五日　一九〇～一九一頁）
「坂口安吾『青鬼の褌を洗う女』の〈私〉」（學燈社刊『國文學』臨時増刊号　三月二十五日　二〇～二一頁）
食の文学を読む　上司小剣「鱧の皮」（學燈社刊『國文學』三月二十五日）
大阪印刷媒体変遷史（『大阪印刷百年史』三月八日　二三二～二六六頁）
小林多喜二の手紙（蔵原惟人宛）・宮本百合子の手紙（宮本顕治宛）（學燈社刊『國文學』九月二十五日　第二十九巻十二号　一八八～一九一頁）
一九八五年（昭和六十年）
日本と朝鮮のあいだ―『小林勝作品集』全五巻（白川書院刊）―（『書評』四月　第七十三号　一七～一八頁）
一九八六年（昭和六十一年）
部落解放基本法の制定を願って（『関西大学通信』二月一日　第百五十二号　第八面）
混乱期の青春群像―活字のなかの青春（『関西大学通信』四月三日　第百五十三号　第六面）
宮本百合子の謎（學燈社刊『國文學』九月二十五日　第三十一巻十一号　一八二～一八三頁）
中野重治「歌のわかれ」の周辺（関西大学『文学論集』十一月四日　九九～一一九頁）
開高健・堀田善衛（至文堂刊『現代文学研究・情報と資料』二〇一～二〇三頁）
川端康成―死生観と文学―（世界思想社刊『自殺者の近代文学』十二月五日　二三一～二六〇頁）
一九八七年（昭和六十二年）
日本近代文学研究余白(1)（『兵庫教育』二月二十日　第四百三十一号　六六～六八頁）

日本近代文学研究余白(2)（『兵庫教育』三月二十日　第四百三十二号　六四～六六頁）
日本近代文学研究余白(3)（『兵庫教育』四月二十五日　第四百三十三号　六六～六八頁）
近代文学に描かれた大阪（玄文社刊『なにわ―大阪商法と大阪文化―』五月三日　二一九～二七七頁）
一九八八年（昭和六十三年）
歩いてみよう―大阪ウオッチング「三好達治・川端康成を偲ぶ所」（『関西大学通信』四月三日　第百七十二号　第五面）
一九八九年（平成元年）
ベトナム戦争と文学者（有精堂刊『講座昭和文学史　第五巻』五月十五日　一七～二四頁）
一九九〇年（平成二年）
日本の中の朝鮮文化―新しく開講される総合コース（『関西大学通信』一月十三日　第百八十七号　第七面）
筒井康隆とクラリネット言語（學燈社刊『國文學』二月二十日　第三十五巻二号　一二八～一三〇頁）
近代の大阪文藝資料（『関西大学通信』四月三日　第百九十号　第八面）
開高健・筒井康隆（學燈社刊『國文學』五月二十日　第三十五巻六号　五四～五五頁　一三〇～一三一頁）
シンポジウム「中島敦『山月記』をめぐって」司会（至文堂刊『国文学　解釈と鑑賞』に掲載）
一九九一年（平成三年）
北条秀司氏の米寿を祝う《文化功労者　北条秀司米寿記念劇作展》について　本学総合図書館（一月十四日『関西大学通信』図書館だより　第百九十六号　第八面）
滝井孝作「無限抱擁」―まっすぐな自我―（學燈社刊『國文學』一月二十日　第三十六巻一号　七九～八一頁）
十五年戦争下の文学（至文堂刊・長谷川泉編『日本文学新史　第六巻〈現代〉』二月十五日　八九～一一二頁、三八五頁）
特集・「在日朝鮮・韓国人問題」を問う〈在日朝鮮人文学〉論の前提（『書評』四月　第九十五号　三二～四三頁）
一九九二年（平成四年）
鮮やかに若者の姿　虚構の世界に浮き彫り〈作品解説〉（二月十五日『関大新聞』第四一五号　四頁）
石原慎太郎「生還」・五木寛之「戒厳令の夜」（學燈社刊『國文學』九月十日　第三十七巻十一号　二〇～二三頁）
安部公房（學燈社刊『別冊国文学　新・現代文学研究必携』十一月十日　二一四頁～二一六頁）

一九九三年（平成五年）
大阪文化論その32　33　34　35　36（「近代の文学と大阪」①二月十五日　②三月十五日　③四月十五日　④五月十五日　⑤六月十五日『関西大学』各号四頁）
書評　伴義孝他著『スポーツの人　大島謙吉』（『関西大学通信』第二百二十号　第七面）
時代への憧憬と葛藤―島崎藤村「春」の世界―（『摂陵』十一月五日　第百二十六号　摂陵中学校・高等学校　六～七頁）
書評　田宮武著『マスコミと差別語の常識』（『関西大学通信』十一月二十九日　第二百二十二号　第八面）
一九九四年（平成六年）
座談会「戦後50年と新日本文学（『新日本文学』四月一日　第四十九巻四号に掲載　小田切秀雄・針生一郎・吉田永宏）
事典項目執筆・住井すゑ・田辺聖子・開高健・大森義太郎およびその作品（明治書院刊『日本現代文学大事典』六月二十日）
住井すゑ「橋のない川」・開高健「輝ける闇」など（明治書院刊『日本現代文学大事典』六月二十日）
安部公房主要著作解題（『ユリイカ』八月一日　第二十六巻八号二二九～二四七頁）
差別と表現―筒井康隆を超えた所で―（『新日本文学』十月一日第四十九巻九号　九六～九九頁）
一九九五年（平成七年）
作家たちの出立ち―その処女作をめぐって―（『摂陵』三月二十四日　第百三十二号　摂陵中学校・高等学校　八～九頁）
平野謙〈私小説論〉の構造（一）（関西大学『文学論集』三月三十一日　第四十四巻一～四号（合冊）一八一～一九八頁）
内海隆一郎の魅力―教材化の可能性を探る―（『月刊　国語教育』六月一日　第十巻四号　一五～一九頁）
内海隆一郎『人びとの季節』解説（〈PHP文庫〉十月十六日）
耽美主義文学における〈美〉―谷崎潤一郎「刺青」の場合―（『摂陵』十一月六日　第百三十四号　摂陵中学校・高等学校　一〇～一一頁）
書評『マスコミと差別表現論』（『関西大学通信』十一月三十日通巻第二百四十号　第七面）
一九九六年（平成八年）
熱田猛「朝霧の中から」―〈部落〉への視点を読む（『新日本文学』三月一日　第五十一巻二号　九八～一〇〇頁）
作家にとってのやすらぎ―川端康成「十六歳の日記」の世界など―（『摂陵』三月二十三日　第百三十六号　摂陵中学校・高等学校　八～九頁）

部落差別と文化・文学（『人権問題と大学』関西大学人権委員会96　三月二十五日　四六～五三頁）
中野重治ノート―江藤淳を視座として―（『新日本文学』六月一日　第五十一巻五号　二四～三三頁）
藤村「破戒」と部落問題―差別性の論議をめぐって―（一）（『関西大学人権問題研究室紀要』六月二十八日　第三十三号　一～二六頁）
好敵手　鴎外と漱石―尊敬しあう文豪―（『摂陵』十一月八日　第百三十八号　摂陵中学校・高等学校　一〇～一一頁）
一九九七年（平成九年）
啄木を生んだ人びと―サポーターとしての金田一京助―（『摂陵』三月二十四日　第百四十号　摂陵中学校・高等学校　八～一〇頁）
椎名麟三の〈観念性〉の問題―初期作品の評価をめぐって―（『新日本文学』五月一日　第五十二巻四号　六一～七〇頁）
戦後文学の研究（世界思想社刊『日本近代文学を学ぶ人のために』七月二十日　一九四～一九九頁）
藤村「破戒」と部落問題―差別性の論議をめぐって―（二）（『関西大学人権問題研究室紀要』十月二十四日　第三十五号　一～二五頁）

一九九八年（平成十年）
金達寿の小説のことなど―共生の前提を求めて―（『摂陵』三月二十四日　第百四十四号　摂陵中学校・高等学校　八～一〇頁）
『世界』主要論文選１９４６～１９５５　戦後50年の現実と日本の選択（『書評』四月　第百十二号　九～一三頁）
野間宏と『人民文学』（『差別とたたかう文化』七月十五日　第九号　二三～三一頁）
藤村「破戒」と部落問題―差別性の論議をめぐって―（三）（『関西大学人権問題研究室紀要』九月三十日　第三十七号　一～二九頁）
芥川龍之介と菊池寛―大正期の作家の友情―（『摂陵』十一月九日　第百四十六号　摂陵中学校・高等学校　三～五頁）
一九九九年（平成十一年）
暗い谷間の苦痛の決断―野間宏「暗い絵」の学生群像（『摂陵』三月二十日　第百四十六号　摂陵中学校・高等学校　五～六頁）
同人誌「えんぴつ」解題（関西大学図書館編『関西大学図書館影印叢書　第一期』上下巻　三月二十七日　第八～九巻）
金達寿の世界　人権問題研究室公開講座（『99人権問題研究室

公開講座』三月三十一日　三一～六九頁）
日本文学史のなかの「破戒」（『部落解放』五月十日　第四百五十三号　一六～二三頁）
佐多稲子追悼座談会「昭和の樋口一葉・佐多稲子の文学と思想」司会（『新日本文学』五月一日　第五十四巻四号　一六～三八頁）
自信の揺らぎこそ真実の人間―芥川龍之介「或日の大石内蔵助」―（『摂陵』十一月十日　第百五十号　摂陵中学校・高等学校　八～一〇頁）
活字の語りかけるもの―書物との邂逅を求めて―（『やまと』第二百七十五号　奈良県教育振興会発行）
二〇〇〇年（平成十二年）
三島由紀夫初期作品の問題―川端康成との往復書簡を契機として―（『関西大学図書館フォーラム』六月三十日　第五号　三～七頁）
沖縄そしてシンティ・ロマ（『新日本文学』七・八月号　四三～四六頁）
細井和喜蔵『女工哀史』―文庫発掘―（『社会評論』第二十六巻三号　七三頁）
近代文学にみる〈夢〉―人間存在の深淵、深層意識―（『摂陵』十一月九日　第百五十四号　摂陵中学校・高等学校　五～九頁）
中野重治の手紙―『愛しき者へ』を中心に―（學燈社刊『國文學』十一月十日　第四十五巻十三号　九七～一〇三頁）
二〇〇一年（平成十三年）
藤村『破戒』と部落問題―差別性の論議をめぐって―（四）（『関西大学人権問題研究室紀要』三月十五日　第三十九号　一～三一頁）
「大正期文人と俳句の世界」（『四国新聞』三月十五日）
文学者の出会い―三島由起夫の場合―（『摂陵』三月二十一日　第百五十六号　摂陵中学校・高等学校　六～八頁）
野間宏と『人民文学』（一）（『新日本文学』十一月一日　第五十六巻九号　二八～三六頁）
内部の変革に至る人間の旅―志賀直哉「城の崎にて」の世界（『摂陵』十一月十三日　第百五十八号　摂陵中学校・高等学校　六～七頁）
二〇〇二年（平成十四年）
文士のベンチャー・ビジネス―鎌倉文庫をめぐって―（『摂陵』三月二十三日　第百六十号　摂陵中学校・高等学校　八～一〇頁）

特権としての美しさと哀しさと―現代文学にみる昭和の若者―（『摂陵』十一月八日　第百六十二号　摂陵中学校・高等学校　三～五頁）

二〇〇三年（平成十五年）

近代文学者と手紙―人間味の溢れたもの―（『摂陵』三月二十日　第百六十四号　摂陵中学校・高等学校　一二～一三頁）

〈千里市民講座〉活字化と「書評」誌収録について（『書評』五月　第百十九号　二～三頁）

小田実さんの講演について（『書評』五月　第百十九号　二八～二九頁）

近代日本文学史を考える（一）（二）―文芸編集者の回想を手がかりに―（『書評』十月　第百二十号　六四～七七頁）

時代を読み取る力―敗戦時の文学者の思いなど―（『摂陵』十一月十日　第百五十六号　摂陵中学校・高等学校　六～八頁）

二〇〇四年（平成十六年）

阪神・淡路大震災と文学・文学者―小田実・田中康夫・金時鐘などの表現行為について（一）（『関西大学人権問題研究室紀要』一月十日　第四十八号　一～三七頁）

「暗夜行路」の時任謙作と直子―辿り着いた強い絆―（『摂陵』三月十八日　第百六十八号　摂陵中学校・高等学校　一〇～一一頁）

近代日本文学史を考える（三）―文芸編集者の回想を手がかりに―（『書評』四月　第百二十一号　五四～七二頁）

阪神・淡路大震災と文学・文学者―小田実・田中康夫・金時鐘などの表現行為について（二）（『関西大学人権問題研究室紀要』八月二十三日　第四十九号　二一～四七頁）

『書評』を表現・発言の主体的な場とし編集体制の確立へ（『書評』九月　第百二十二号　二～三頁）

近代日本文学史を考える（四）―文芸編集者の回想を手がかりに―（『書評』九月　第百二十二号　八〇～九三頁）

二〇〇五年（平成十七年）

『武井昭夫対話集　わたしの戦後―運動から未来を見る』私注（上）（『書評』四月　第百二十三号　一一八～一三三頁）

「『人民文学』誌の徳永直―その評論活動について」（『浪速書林古書目録』五月八日　第三十九号）

阪神・淡路大震災と文学・文学者―小田実・田中康夫・金時鐘などの表現行為について（三）（『関西大学人権問題研究室紀要』九月一日　第五十一号　一～二六頁）

『武井昭夫対話集　わたしの戦後―運動から未来を見る』私注（中）（『書評』九月　第百二十四号　一四六～一六三頁）

二〇〇六年（平成十八年）

『武井昭夫対談集　わたしの戦後―運動から未来を見る』私注（中のつづき）（『書評』四月　第百二十五号　一七二～一八九頁）

『武井昭夫対談集　わたしの戦後―運動から未来を見る』私注（四）（『書評』九月　第百二十六号　八四～九九頁）

（増田周子作成）